

海外研修報告

国際児童養護施設(スイス)を訪ねて

——「ペスタロッチ子供の村」視察報告——

白 佐 俊 憲 加 藤 満 北 村 優 明

I は じ め に

このレポートは、1983年3月20日～4月8日の20日間、報告者3名が「北海道女子短大海外研修規程」に基づく旅費支給を受けておこなった「中央ヨーロッパ3国の教育・体育施設視察」の研修成果を報告するものである。ここでは、スイスにある国際児童養護施設「ペスタロッチ子供の村」の視察結果についてのみ報告する。なお、この旅行の成果については、自由ヴァルドルフ学校関係分はすでに報告済みであり、このレポートは第2報に相当するものである。

「ペスタロッチ子供の村（Kinderdorf Pestalozzi）」は、スイスの北東端に近いトローゲン（Trogen）という村にあり、戦災で孤児になった他国の子供を収容し、養護・教育を与え自立の道を歩ませるとともに、相互理解・協力を通して子供たちの中に国際理解を深めさせようという目的で設けられた世界的にユニークな児童福祉施設である。すでに40年近い歴史を持っており、その運営理念とこれまでの実践成果は高く評価されているところであるが、近年、いわゆる第三世界の国々からの子供が多く収容されるようになってきたことから、今後の運営と成果が一層注目されるようになった。

同行者の1人は、すでに1979年7月、この施設を訪問している。しかし、その時は同行者が多数であったため、プライベートな生活の場の見学は許されなかった。そこで、今回の訪問は、国別に運営されている家（寮，Haus）での子供の生活をぜひ見学したいという願いを込めておこなわれた。日本に近い国ということで「韓国の家」の見学を申し込んだところ、快諾が得られた上に、親の役割を果たす先生が日本語を話せることがわかり、長時間にわたり懇切な説明を受けるチャンスにも恵まれた。

以下、2日間にわたっておこなった「ペスタロッチ子供の村」の視察結果を報告する（帰国後、年報の送付を受けたので、これからの引用も含めておこなう）。

II 子供の村の所在と鳥瞰

われわれ3名は、1983年3月31日、借り上げ自動車でオーストリアのインスブルックを出発し、リヒテンシュタイン経由でスイスに入り、ペスタロッチ子供の村（以下、子供の村と略す）へ向かった。まだ所々に雪が残る時期ではあったが、ボーデン湖からザンクトガレン（セントガレン）市を経てトローゲンへ向かう沿道は、静かな農村が続き、のどかな牧場があり、美しい風景の中に落ち着いたたたずまいが感じられた。トローゲンという村は、ボーデン湖へは20km

程度の道程であり、ザンクトガレン市へは通勤可能な所に位置している。

子供の村は、ゆったりと形成するトロージェンの市街地から少し離れた小高い丘の上にあった（トロージェンの村全体が山あいにある）。一つの小さな村を形成していて、約30の赤い屋根の建物が50ha（農場・牧場を含む）の土地に、木々に囲まれて点在していた。入村した子供の居住する15の家が適当な間隔をとって配置され、それと調和をなすように、学校・幼稚園、作業所、礼拝所、中央炊事場、売店、管理棟、職員住宅、家畜小屋などが並び、中心部にはグラウンドや遊び場が配置されている。子供の村全体を提供された写真で鳥瞰してみよう。写真2は夏の全景である。

写真1 シンボルのクマの親子

村の入口の道端には、門柱を兼ねた抱き合ったクマの親子のコンクリート像がある。これは、子供の村のシンボルである（写真1）。

なお、子供の村の名称・所在地・電話番号は、次のようになっている。

Kinderdorf Pestalozzi Trogen

CH -9043 Trogen, Schweiz

Tel. (071) 941431

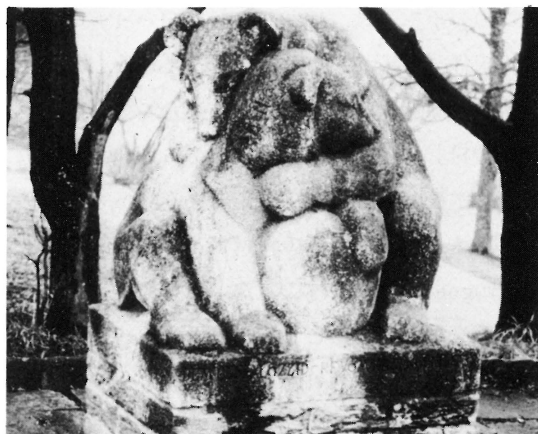


写真2 ベスタロッチ子供の村(夏の全景)



Ⅲ 子供の村の創設と歴史

第二次世界大戦は、ヨーロッパのいたる所で、無数の戦災孤児が行く所もなく街頭にさまよう悲惨さをもたらした。この惨状について、1944年8月、月刊誌“DU”でコールティ（W. R. Corti）が“A Village for Suffering Children”というタイトルで施設作りを社会に訴えたことが発端になり、1945年1月、「ペスタロッチ子供の村協会」が創設された。子供の村設立の目的は、身体的にも精神的にも不健康な状態にある孤児たちに生活の場を与え、物質的・知的・情緒的援助をしようとする事、及び国民性・宗教・言葉の違いを超えた相互理解と協力の場とし、子供たちに国際理解を深めさせようとする事にあつた。また、これらの子供たちが母国に帰ることのできる日のために、その国の社会及び環境に適応できるように母国語を教え、母国についての知識を与え、母国の文化や習慣を失わせないようにする配慮もなされた。

「ペスタロッチ子供の村」という命名は、ペスタロッチ（J. H. Pestalozzi）がスイスに世界最初の児童福祉施設を開設し、教育の理想をかかげたことにちなみ、また、子供の村の運営理念をペスタロッチの教育思想に求めたことからなされたのである。

現在地に建物ができあがったのは1946年4月であつたが、すでに1945年12月にオーストリアの戦災孤児を受け入れ、事業は始められていた。主要施設の竣工後、1946年5月にフランスからの子供が到着したのを初めとして、1948年10月までに、ポーランド、ハンガリー、ドイツ、イタリア、フィンランド、ギリシアの各国から戦災孤児や貧困家庭児が送られてきた。さらに、1950年9月にはイギリスからの子供を受け入れ、1951年の夏には地元スイスの要保護児も収容するようになった。このように、子供の村は当初、もっぱらヨーロッパの子供を救済していた。

しかし、経済の復興とともに、ヨーロッパの社会情勢は漸次改善されていったので、ヨーロッパの国々からのニーズは少なくなり、入村する子供が減少してきた。これに伴い、子供の村では、受け入れる国を、戦災と貧困で苦しんでいるアジア・アフリカの国々にも広げることになった。1960年10月、チベットの子供を入村させたのを初めとして、韓国、チュニジア、インド、ベトナム、エチオピアからの子供が受け入れられた。次第にアジア・アフリカの国々の子供の占める割合が高くなり、1966年～1975年の入村児では約50%に達した。

ヨーロッパ出身の子供たちには自国に帰る者の割合が多いのに対して、残念ながら、アジア・アフリカ出身の子供たちには、自分の故国に帰る望みが少ないのが実態である。したがって、子供たちは、この村で青年期を迎えることになる。当然、青少年の占める割合が高くなり、若者対策に力を入れなければならなくなった。1967年7月、義務教育を終えた青少年だけを収容する「若者の家（Jugendhaus）」を初めて設けた。その後、ヨーロッパの国の家が閉鎖されるのを機会に、1971年3月に第二の、1977年5月に第三の若者の家を誕生させている。

1980年までに「家」が設けられた国と、家が設けられていた期間を示すと、次のようになる（調査時点、1983年5月現在）。

オーストリア……1945年12月～1971年7月 フランス………1946年5月～1971年7月

ポーランド……………1946年12月～1949年夏	スイス……………1951年夏 ～1971年3月
ハンガリー……………1947年6月～1949年夏	チベット……………1960年10月～現在
1956年11月～1969年4月	韓国……………1965年10月～現在
ドイツ……………1947年7月～現在	チュニジア……………1965年12月～1982年？月
イタリア……………1948年4月～現在	インド……………1970年11月～1982年春
フィンランド……………1948年4月～現在	ベトナム……………1972年6月～1977年5月
ギリシア……………1948年10～1982年？月	エチオピア……………1974年3月～現在
イギリス……………1950年9月～1976年7月	

入村した子供の数については古い資料しか入手できなかったが、30周年記念を機会にまとめられた報告³⁾によると、1975年までの30年間に、16か国の1,081人の子供に援助の手を差しのべたという。内訳は、ヨーロッパ10か国880人（フランス149、イタリア136、ギリシア117、イギリス108、ハンガリー75、フィンランド74、ドイツ72、オーストリア65、スイス52、ポーランド32）、アジア4か国153人（チベット67、韓国45、ベトナム21、インド20）、アフリカ2か国48人（チュニジア35、エチオピア13）となっている。

子供の村運営の母体である「ペスタロッチ子供の村財団」（1950年10月設立）は、30年を経過した（子供の村自体は35年）時点で、財政的に大きな変化に直面したこと（後に述べる）もあって、財団としての活動・運動、子供の村の運営に新しい方向を打ち出した。それは、援助の多様化である。すなわち、後に述べるように、遠く母国を離れて長期間滞在することが果たして適当か（インドの家の閉鎖は、主として子供たちが村の生活に適応できなかったことにあるとされている）、この村で青年期を迎え、ヨーロッパに住みついてしまうことは、当初の目標であった「母国に帰って、母国に奉仕する」点からは問題があるのではないか、という反省に立ち、子供の出身地との結びつきを重視した活動・運営を加えたのである。

この線にそって、1982年から、3か月ないし6か月の休養滞在をグループですという方法を一部取り入れた（レバノン、ポーランドの家）。また、1982年10月から始めた新事業の「現地での援助（Hilfe an Ort）」もあげられる。後者は、チューリヒ（スイス）の財団本部事務局が中心となって、計画・構想を立て、戦災や旱魃によって孤児・飢餓の状態にある子供たちに、その国（現地）で諸機関の連携のもとに援助の手を差しのべようとするものである。それは、食料や衣類をその国に送り届けることであり、子供の村のような施設をその国につくる手助けをすることである。

子供の村自体の運営体制も大きく変わり、37年間続けられてきた「1人の村長による指揮」を、1983年4月から「5人の指導チームによる指揮」へと改めた。5人はそれぞれ管轄や権限を分担しながらも、緊密な協力・共同作業をおこなうことによって、従来にまして強力な指導・管理体制を作り、今後の新しいプロジェクトの効果を上げようとするものである。

在村子供数の現状は、1983年5月現在、15棟ある「家」のうち、火災や計画終了で閉鎖になり新計画が練られている3棟のほかは子供を収容しており、総定員220人に対して、子供72人、

若者40人、週末帰宅若者29人、合計141人となっている（大学在学などで村を離れている者は含まない）。家別の内訳は、表1のとおりである。

表1 子供の村の家別在籍者数²⁾ (1983年5月現在)

「家」の名称	国籍等の別	子 供	若 者	週末帰宅 若 者	備 考
Pinocchio	ポーランド	10人	0人	0人	3 か月ごとに交替する グループ
Lalibela	エチオピア	12	8	0	
Arirang	韓 国	8	1	6	
Al-Amal	レバノン	15	0	0	6 か月間の休養滞在
Jukola	フィンランド	6	0	0	
Lugsung-Ngoen-Ga	チベット	6	7	0	
Yambhu Lagang	チベット	6	0	2	
Ganga	ド イ ツ	0	5	1	
Cuore	イ タ リ ア	9	2	0	
Thames	若 者 の 家	0	5	8	
Heimetli	若 者 の 家	0	6	4	
Odyssee	若 者 の 家	0	6	8	

子供の村には28の建物があるが、おもなものについて簡単にふれておこう。子供の村の中に学校が開設されたのは1949年10月で、独立校舎ができたのは1960年11月である。独立校舎建築と同時に、幼稚園や木作業場も設置された。1967年12月には、すべての宗教のための礼拝所が建てられ、1968年4月には、農場の建物も整備された。

Ⅳ 子供たちの日常生活

子供の村には、子供たちが居住する「家（寮，Haus）」が15棟ある。各家は12～18人の同一国籍を持った子供を住まわせるようになっており，Haus Eltern（家の両親）と呼ばれる親代わりのもとで家庭的雰囲気味わわせ，かつ一緒に住んでいるうちに忍耐・配慮・尊敬・相互扶助の精神を身につけ，さらに，国際理解を深めて平和を希求する心を養わせるようになっている。日常生活の指導・監督は，この両親が主として当たるのであるが，両親がいくつかの役割をもち多忙であることから，各家には，現地採用（別国籍）の2人の保母が生活を共にするようになっている。

各家には外見はほぼ同じ感じを受けるが，規模が異なり，内部の装飾はそれぞれ自由であり，国柄が随所に見られ面白い。“Pinocchio”などという愛称が各家につけられている。すべて木造の家で，内部も木目を模様にした質素な造りである。見学を許された「韓国の家」は，1階に食堂兼居間，台所，子供部屋2，2階に子供部屋5，3階に寮長たちの部屋，地階（地下ではない）に勉強室，外来者用宿泊室などがある。子供部屋は15㎡位で，2人ずつ入っている。机・ベット・本箱などが置かれ，各自思い思いの部屋の飾りつけをしている。清潔で，明るい雰囲気がうかがわれた。勉強室には，辞典や百科事典などが並べられた書架があり，ピアノも置かれていた。

写真3 子供の村の家と遊び場

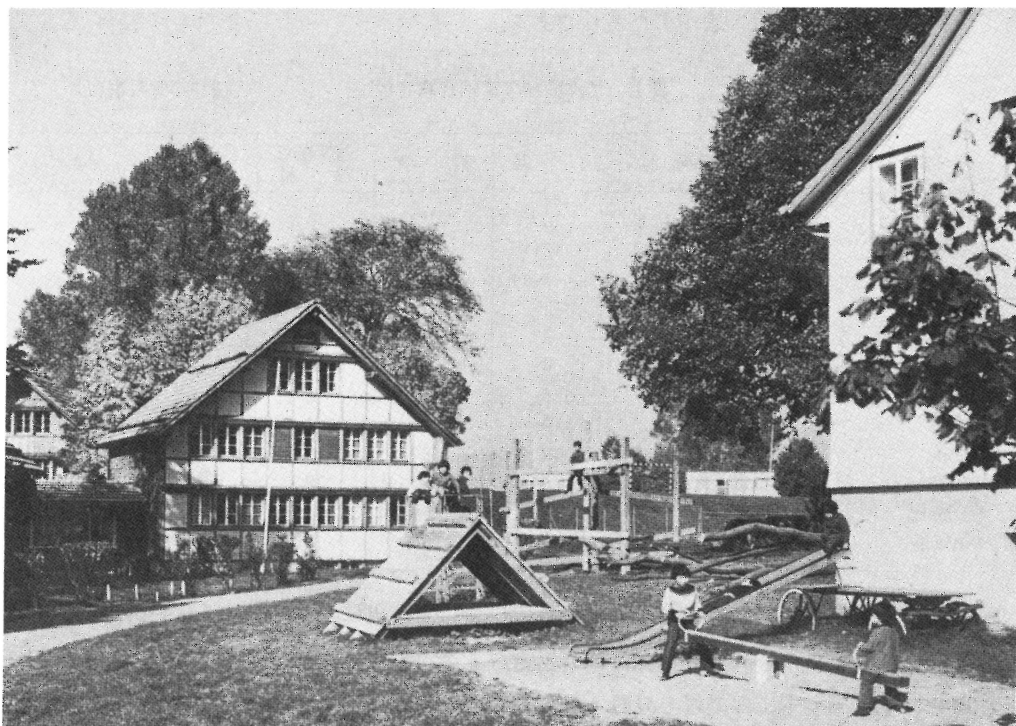


写真4 遊びに興ずる子供たち



写真5 「韓国の家」の玄関で



(左から加藤, 李先生夫妻, 子供たち)

写真6 子供たちの部屋(韓国の家で)



トローゲンの村全体が教会の鐘の音を中心に生活しているように、子供の村全体に時を知らせる鐘があり、各ハウスにも鐘がある。それぞれ違った音色で生活の刻みを知らせるようになっている。

子供たちは6時30分までに起床し、掃除や炊事当番をし、食事を終わらせ、7時30分までに登校する。10時におやつを食べに一時帰宅し、12時には昼食を食べに帰ってくる。14時過ぎになると、午後の授業や課外活動のため、学校やグラウンドに出かける。サッカーやスキーなどの遊びやおけいこごとなどをして夕食まで過ごす。早寝早起の規則正しい生活習慣が保たれている。食事はすべて中央の炊事場で作り各家に配られるが、味付けは各国の家の好みに応じてするようになっている。母国から送られてきた食品を味わうことも勿論ある。

子供の村全体として、毎月、スポーツの対抗試合、パーティ、映画会、旅行などの多様な行事が開かれる。これらは、毎週1度16時ごろから開かれる全員参加の話し合いで、子供たちが中心になって計画される。少額ではあるが、小遣いも支給される。

夏休みには、すべて旅費は子供の村持ちで、母国の自宅に帰ってくるようになっている。帰る家のない者に対しては、スイス国内の有志に預けられ、バカンスを楽しむシステムができていたとのことであった。

子供の村での共通語はドイツ語である。村の生活にとけ込むためには、いかに早くドイツ語を習得するかが課題となる。子供は覚えが早いので、1年位で日常会話は十分話せるようになるので、実際には問題がないという。しかし、いくつかの国の子供が集まった村であるので、使われるドイツ語は正しいものではなく、「ペスタロッツ村のドイツ語」といわれるような独得な言葉になってしまいがちで、外部では通じないことも起こるらしい。正確なドイツ語を話すのは指導者など一部の人に限られるし、どうしても子供同士で話す機会が多くなるので、やむを得ない一面をもっている。各家では、自国語を忘れないように、また、一層上達するように両親（寮長）から指導を受ける。

ここで、宗教についても触れると、子供の村では宗教は自由であるとされ、各国の宗教によっている。宗教教育は、各家の寮長によってなされる。学校のそばの見晴らしのよい一角に、扇形をした木造の礼拝所がある。中の造りは、扇の^{かなめ}要の部分^{かなめ}が少し高くなっており、それに向かって座るように、階段式の椅子が並んでいる（大学の階段教室の小さいものを想像すればよい）。しかし、中央の高い台は説教をする場所ではない。誰が話をしてもよいが、説教をしてはならない。キリスト像もマリア像もない。子供たちは、いつでもここにきて、自分のお国柄通りに、また個人の思う通りに、自分の信じる宗教に祈りをささげてよいのである。

義務教育の課程が終わると、各国の家を出て「若者の家」に移る。定員や各家の指導上の理由で、若者の家に移らないで生活をする者も何人かはいる（表1）。

V 子供の村の学校教育と職業指導

子供の村には学校（9年制）と幼稚園とがあり、独立校舎が各家から1～5分で行ける所に

ある。年少の子供の数が減少してきていることもあって、教育施設はトローゲンの村の子供たちに開放され、活用されている。特に、幼稚園は園児のほとんどが子供の村の近所に居住する家庭の幼児であり、充実している図書館はトローゲンの青少年にも多く利用されている。

学校は、各国の子供をすべて混合した、小人数の年齢別学級編成になっている。1982年度は1学年から9学年まで52名が在籍し、14名が義務教育を終えた。学校は専任の教師集団によって運営されているが、教師の資格を持つ各家の両親も、自国の子供たちに対して母国の国語と歴史の科目を教えるシステムになっている。午前中は7時30分から45分単位の授業が5時限あり、午後は14時から16時まで授業や課外活動がおこなわれる。

学校ではドイツ語で授業がおこなわれるが、子供たちの間にドイツ語の習得度や学力差・能力差があることから、実際には、教師にとっても、子供にとっても相当な困難が伴うようだ。例えば、比較的能力の低い者が入村してきたと判断されるインドの家の子供たちの場合は、義務教育期間内に、基礎教育の終了はもとより、ドイツ語自体も十分身につくまでに至らなかった者が多かったため、村の生活にも十分適応できず、結局、家を閉鎖し帰国させなければならなくなってしまった。一方、能力の高い者が選ばれて入村したと思われる韓国の子供たちの場合は、ドイツ語の習得はスムーズにいき、学校の授業を受けるのにまったく問題はなく、むしろ授業の程度が低いとか、進度が遅いとかの不満をもらす者が出るほどだという。こうした実態に対処するために、学校運営にさまざまな工夫がなされている。①スポーツや芸術・創作的科目を重視する、②日常生活の中から問題を取り上げ具体的に追究していく方法で授業を進める、③国際色豊かな学校だからこそないう相互理解と仲間意識づくりに力を入れる、④すべての子供に対し能力・適性に応じ高い教育を受ける機会を与える、などがそうである。

今や「子供村」は「若者の村」になってきている。というのは、前にも述べたように、アジア・アフリカ諸国からの子供は故国に帰る望みがないことから、村で青年期を迎えざるを得ない者が増えているからである。そこで村では、これらの者のために職業訓練や高校・大学への進学について、早くから取り組む体制がとられている。

中学校の段階になると、子供たちは、スイスでの進学や職業訓練の可能性について、規則的な指導を受けるようになっている。職業の選択は母国の状況も考慮に入れなければならないので、個々に家の両親とも徹底的に時間をかけて話し合いがもたれる。どういう職業につくか、どの学校に進学するか、どういう職業訓練を受けるかについての話し合いのほかに、近在の市の工場や訓練学校などを何度も訪問してから、進路の方向が決定される。専任のカウンセラーもいて、単なる仕事さがしではなく、適性を重視した天職を身につけるべく慎重な指導が加えられるようになっている。勿論、能力のある者に対しては、高校・大学への進学が積極的にすすめられる。すべての学費は村の経費の中から支出されるので、子供たちは安心して高い教育を受けることができる。どのような教育を受けようとも、卒業後はまったく自由であり、何の義務も課せられない。

義務教育終了後ただちに職業訓練を受けることになる者は、大部分は村に住みながら訓練の

場所（多くはザンクトガレン市）へ通うことになるが、一部の者は住み込みで週末だけ村に帰ってくるようにしているものもある（表1の週末帰宅者）。不適応者が出ないように、定期的に話し合いの場を設けるほか、教師による依託先訪問もなされる。週末帰宅者の場合、十分な話し合いの場をもちにくい面があるので、特別な注意と努力が払われている。訓練生たちが個人的な経験や悩みについて話し合う場として、年2回、「生活技術キャンプ」が設けられる。職業訓練はすべて村の外でおこなわれるのではなく、時には外部から人を頼んで村の中で教わることもおこなわれる。

大学への進学は、スイスという国が経済的に安定していること、一般的にそれほど大学志向が強くないこともあって、10%以下にとどまっている。そういう子供の村全体の風潮の中にあって、特異な存在として注目されるのは韓国の家の子供たちである。1965年の入村以来18年が経過しているが、この間に入村した韓国出身者46人においては、約50%が大学に進学しているという。孤児として国を出て、何年もヨーロッパ感覚で教育を受け帰国した場合、家族意識・同窓意識が強い韓国においては、受け入れに問題があり、適応もできないのではないかという懸念がある。そこで、故国へは帰れない、帰らない、東洋人としてのハンディキャップをはねのけて外国で暮らすには、高等教育を受けて高級な職業につくのが一番だ、大学へ行くのなら博士の学位を目標に頑張ろう、……ということになり、それを望む子供たちの真剣な学習への取り組みがこれを現実のものにしているのだという。

1982年12月31日現在の若者（義務教育終了者）84人の教育状況は、職業訓練中の者39（13）人、実業高校在学者14（7）人、普通高校在学者5（3）人、高等専門学校在学者6（1）人、大学在学者13（5）人、その他7（2）人となっている（教育機関の名称は複雑であるので、日本の相当のものに置き換え、単純化して示した。かっこ内は女子の数）。また、1982年中に資格を取得したり、就職したりした者についてみると、医師、建築技師、自動車技師、理容師、マッサージ師、精神医学看護人、歯科医助手、貿易商、レジャー指導員、版画家、実験助手、店員、道路建設員などの職種があげられている。

Ⅵ 子供の村の入村・退村

話は前後するが、ここで、子供の村への入村・退村がどのようにしてなされているか、手続き的な面に重点を置いて述べてみよう。

最初にも述べたように、この村の出発は戦災孤児の救済であったが、時代の変化に応じて、被災・困窮家庭児の援助というように対象範囲を広げた受け入れがなされるようになった。永世中立宣言にみられるような世界平和への切実な願いと、人は皆どんな人でも同じであるというスイス人の一般的な考えが根底にあり、国際関係や国際協調が受け入れ国を選ぶ第一の条件にはなっていない。あくまでも、子供たちの置かれている窮状が問題にされる。

1981年版の「ペスタロッチ子供の村年報」によると、入村基準は次のようになっている（要約）。すなわち、受け入れられるのは、捨てられたり、居住地や国を失ったりした0～15歳の²⁾

子供で、近い将来に解決できない問題をもっている（帰国させたり、連れ戻したりすることの見通しが立っていない）場合である。そして、①それらの子供のために、子供の村が成果が期待できる形で必要な援助をおこなえること、②国単位で、8～10名の男女の子供からなる「家」を形づくって、有効な世話ができること、③一人一人の子供に、特別な保護や教育を必要とする身体的・精神的障害がないこと、④数か国語を話す国際色豊かな子供の村での教育・訓練が、年齢的に一人一人の子供の発達を促進する（阻害しない）ものであると確認されていること、が条件となっている。成長段階にある限り、別け隔てなく子供を受け入れていきたい、との言葉で結んでいる。

実際的には、退村者が出るなどして欠員が生じたとき、子供の村から各国の政府（代表的機関）を通して児童福祉施設等に照合し（家の構成がうまくいくように、年齢・性別などの条件をつける）、候補者を数人あげてもらい、書類選考で村の関係者で最終的に決定する。韓国の家を例にとると、子供の村と韓国の政府との公式的な契約によって子供を預かることになるので、欠員が生じると、まず、人数・性別・年齢を指定して、韓国政府の社会部児童課に推薦を依頼する。これに基づいて、児童課では、韓国内の若干の施設に照会して希望者を募り、入村可能数の2、3倍程度に第一次選考をおこなう。この候補者の詳しい書類が子供の村に送られてくる。子供の村では、家の両親（寮長）と村長と学校長の4人で、健康・生育歴・学業成績などを総合的に検討し、入村者を決定する。表立って強調されないようであるが、異国の社会での適応・自立は容易でないことから、能力的に平均以上の子供であることが第一の条件になっているように思われた。入村時の年齢は、5～9歳がほとんどである。

退村は、規定では男子16歳、女子20歳となっているが、帰国できない義務教育終了者が増加していることから、自立するまでいることが許され、また学費等の援助を受けることができるようになっている。実際は十分な指導を通してなされるのであるが、退村後の身の処し方は自由であり、帰国してもよいし、子供の村の近くに就職してもよいし、ドイツなどの外国へ行ってもよい。退村後、子供の村に対して何の義務もない。

スイスでは、義務教育の課程を終わると永住権が得られ、結婚すると国籍も得られるので、スイスに住み、スイスで結婚する者が多い。韓国の家の出身者についてみると、東洋の女性は好かれるのだそうで、最初に来た4人の女の子は全員20歳前に地元で結婚してしまったとのことである。韓国の家の出身者で帰国したのは2人にすぎず、多くは地元スイスをはじめ、ヨーロッパ、アメリカで、身につけた高い学歴・技術、マスターしたドイツ語・フランス語・英語などの語学力を生かし活躍している（勤勉家・努力家であることが買われ、信頼され、高い地位を得て、高給取りになっている例が、こちらに来て13年目になるという李先生の口から次から次へと出てくるのには驚かされた）。

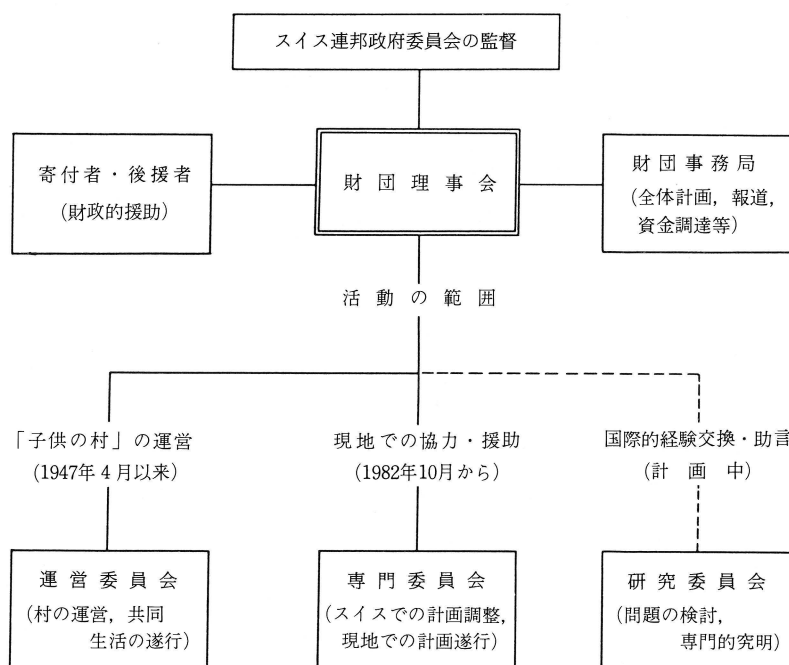
子供の村では退村者の状況をよく把握していて、適宜必要なフォローをして、失敗者が出ないように配慮している。退村者は、子供の村を自分の故郷と思い、出身の家を自分の家と思い、寮長夫妻を自分の両親と思い、寝食を共にした同郷の仲間をきょうだいと思い、村を訪ねるこ

とを楽しみにしているという。仕事のことや生まれた子供の様子を手紙・電話で伝えてきて、ぜひ自分の家にも訪ねて来てほしいとせがまれるのだそうだ。子供の村にいたことに対する劣等感・嫌悪感などは、韓国の家で聞いた限りでは、まずないといえる。

VII 子供の村の運営

子供の村全体の機関・組織や財政はどうなっているか。ここで、運営面についてまとめておこう。ペスタロッチ子供の村は、スイス連邦政府委員会の管理下にある財団である。財団の執行機関は、理事会と委員会であり、図1のような組織機構になっている。財団の本部はチューリヒ（Zürich）にあり、ここで全体計画の立案や報道関係、資金調達などの事務的な仕事が行なわれている。財団理事会は31人、運営委員会は6人、専門委員会は7人の委員からなり、委員はヨーロッパ各国の有識者で構成されている。従来一つの委員会で運営していたのであるが、最近になって財団としての活動・運動に新方向が打ち出されたのに伴い、三つの委員会に専門分化することになり、1982年10月からまず専門委員会が分化したのである。

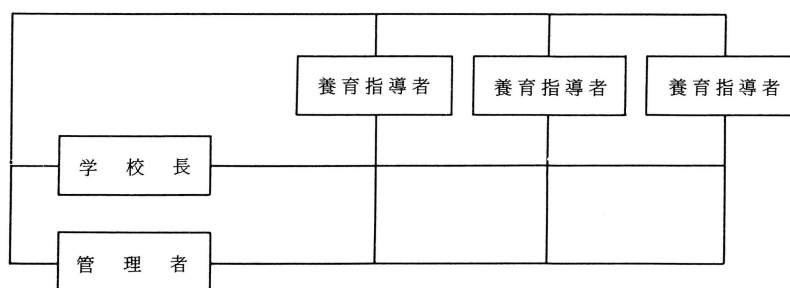
図1 ペスタロッチ子供の村の組織機構²⁾



財団全体の機構改革に伴い、子供の村の実際の指導・管理体制も変わった。丁度われわれが訪問した時期を境に新しい体制になったのであるが、過去37年間、1人の村長によって指揮してきたのを改め、図2のように3人の養育指導者（15の家を分担し、運営その他の指導に当たる）、1人の学校長（学校の運営）、1人の管理者（事務・管理部門を担当）がチームを作り、養育指導者の1人が議長になり合議制で運営していくことになった。5人それぞれが管轄や権

限を分担しながらも、緊密な協力・共同作業をおこなうことによって、従来にまして強力な指導・管理体制がとれるようになると考えられたからである。

図2 子供の村内部の指導・管理体制²⁾



この指導チームの下に、各家があり、学校があり、事務・管理部門その他がある。子供の村の存在の中核になるのは、いうまでもなく子供たちが分散収容されている「家」である。すでに述べたように、各家の指導者は、「家の両親（Haus Eltern）」と呼ばれる、親代わりを務める人たちである。この両親は、子供たちと同一の国籍をもち、自分の国で教育を受け、かつ教師の資格・結験をもった夫婦であることが条件になっている。この村からの要請に応じて、各国政府が選考し、派遣してきた者である。幼児・児童期を中心に何年もの間（子供によっては10数年にわたって）一緒に暮らし、文字通り親として子供の養育に当たるのであるから、この両親の一人一人の子供に与える影響は極めて強いといえよう。異国の地で閉鎖的になりがちな各家で、子供たちは、両親の人生観や教育能力に大きく左右されて育つことになる。

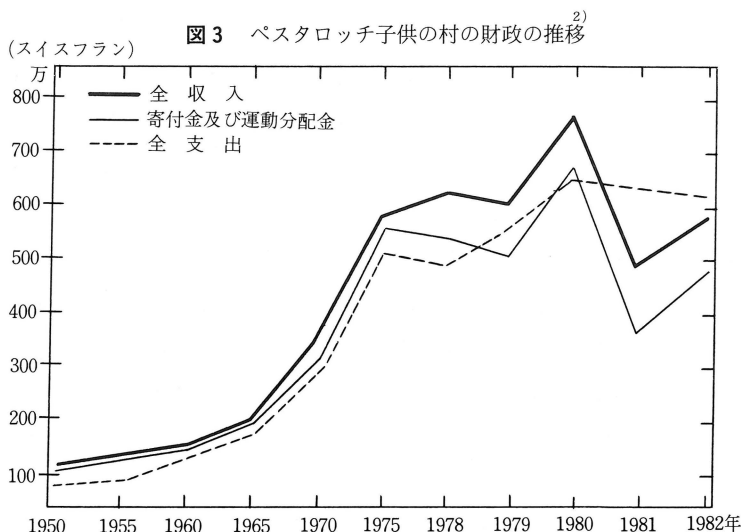
この両親の勤続年数は平均3～4年で、ヨーロッパの国の家に勤める人は比較的短い。特別な生活であり、自由がなく、24時間個人生活が拘束される点で、ヨーロッパ人にはなじまない勤務体制だという。極端な場合、1年も勤めることができなかったそう。ボランティア精神だけでは続かないきびしさがある。その点、アジア・アフリカの国から派遣されてきた両親の場合は、それを承知で志願してきた人が多いだけに、長続きしている。韓国の家の李先生夫妻の場合、13年を経過しているが、今日に至ってしまった理由を次のように話してくれた。

「初めは3、4年のつもりであった。しかし、前任者に引き継ぐ形で親子関係を作るのは難しく、スムーズな関係を作り上げるのに3年かかってしまった。安定した状態になると、うまくいっていればそれだけ辞めずらくなってしまった。更に3年、と続けているうちに、3人の子の教育が中学校・高校段階に来てしまい、ここで帰国したのは、大変な苦勞を強いることに気づいた。そこで、この子たちの教育が終わるまでスイスに留まることにした。今、2人は大学生になり、1人は高校生である。幸福な人生を歩ませることができたと喜んでいる。このごろ、冗談でいう話なのであるが、実子のようになじんでいる子供たちは、大きい子供は『帰るのなら、一緒に帰ろう』、小さい子供は『ボクらはどうなるのさ……』と困らせる。本当の親のように慕われ、頼りにされていると思うと、とても帰国する気にはなれない」

次に財政面について概観してみよう。具体的な数字にふれる前に、子供の村の財政的運営がどのような考えに支えられて成立しているかについて述べる。入手した英文パンフレットの最後に「子供の村は、政府からは少しの助成金も受けないで、すべて村の友人たちの支援によって」とこともなげに述べている点に注目する必要がある。つまり、村の運営のための経費は、ほとんどがスイス国内の個人や団体や企業の寄付金でまかなわれているのである。李先生の説明によると、「余った金があるから送るというのではなく、小額でも送って誰かを助けてあげたいという精神で、数万の人が10～20フランを寄付してくれることが支えになっている。一般の人の善意の総額は村の全収入の何分の1にしかないが、この支援層の厚さがあるからこそ今日まで村の維持ができたのだ」という。この基本精神は、また、「第二次世界大戦後、多くのスイス人が、戦災を免れた私たちは不幸な経験をした人たちに何かをしてあげなければならない、与えることができるものは何か、と考え、W. R. コールティの提唱に応えた」時点—ペスタロッチ子供の村の創立—から受け継がれてきたものでもあるという。

さて、図3に、子供の村の財政の推移を示した。この図は、1981年版の「子供の村年報」に掲載されている図を修正・加筆して作ったものである。この図から、1980年までの30年間は常に収入が支出を上まわり、健全財政のうちに運営規模が年々拡大してきたことがわかる。しかし、最近2年は収入減により赤字となっている。過去の蓄積により、当面の運営には支障はないのであるが、収入のほとんどを寄付金によっているだけに、将来には不安がある。収入減は、世界的な経済の冷え込みの影響と考えられるが、寄付をする人の減少も一因となっているようだ。それは、子供の村の運営に対する批判とも受け止められる。聞くところによると、寄付金を送ってくる人たちから、子供の村はなぜ豊かなイタリアやドイツやフィンランドの子供を育てるのか、第三世界といわれる発展途上国には戦災や飢餓で不幸な目にあっている子供が沢山いるというのに、……との批難が寄せられているという。

1982年の収支を簡単にふれておくと、収入総額は579万フラン（約6億8千300万円）、支出



総額の614万フランで、35万フランの赤字となっている。収入は、遺産寄付の200万フランを初め、心の里親システムの里親からの寄付93.6万フラン、著作物販売59.3万フラン、郵便貯金の利子寄付47万フラン、スポーツ選手の慈善活動・試合39万フランなどである。一方支出は、子供の村での経費が439.7万フラン、財団運営その他が174.3万フランとなっている。子供の村での経費の内訳は、15の家の費用210、学校教育費100、職業訓練費57.1、運営管理費50、進路指導費22.6（各万フラン）であった。

Ⅷ お わ り に

以上、ペスタロッチ子供の村について、見聞したことと資料によって概要をまとめてみた。すでに本文の中で、問題点や今後の方向について説明済みであるが、特に次の3点が重要な課題となるのではないと思われる。

① ヨーロッパ各国では自国にある施設でも空いている状況にあり、ドイツの家が閉鎖を決定しているのをはじめ、残るヨーロッパの国、イタリア・フィンランドの家も徐々に縮小していく方向にある。したがって、第三世界の国々の子供たちだけで子供の村を作る日も、そう遠くないかもしれない。アジア・アフリカの国が主になるということは、一層、言語や宗教や生活習慣の違う者が集まるのであり、村全体としての生活指導や学校教育に今迄以上の困難を伴うことになるであろう。

② いくつかの国の子供がそれぞれ別の家に住みながら共同生活を営むことから当然予想されることであるが、各家において、他の国に負けまいとする競争意識があるようである。これは子供自身よりも指導者（両親）の意識の問題であり、よい方向で発展すればよいが、一寸と誤ると当初からの目的である国際理解の精神からはずれていくおそれがある。

③ 現地での援助に力を入れ、食料や衣類を送り、教育施設づくりを進めることになれば、スイスの子供の村は必要がないと考えられる時がくるかもしれない。しかし、李先生も強調していたのであるが、国際的雰囲気の中でお互いに協力・助け合いながら学ぶ場も大切なのであって、創立の理想のともしびが消えないことを願うのである。

なお、前報告・今報告で触れなかった中央ヨーロッパ3国の体育施設については、次号の研究紀要で第3報として報告する予定である。

最後に、この視察旅行に御理解・御援助下さった本学関係の皆さんに、また、現地でお世話になったペスタロッチ子供の村の関係者の方々、特に韓国の家の李学杓先生御夫妻に、心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 白佐俊憲・加藤満・北村優明：シュタイナー教育を訪ねて－自由ヴァルドルフ学校視察報告－，北海道女子短大研究紀要，第18号，p. 73～90，1984
- 2) Kinderdorf Pestalozzi Trogen Jahresbericht，1981，1982

3) Pestalozzi Children's Village Trogen, 1978

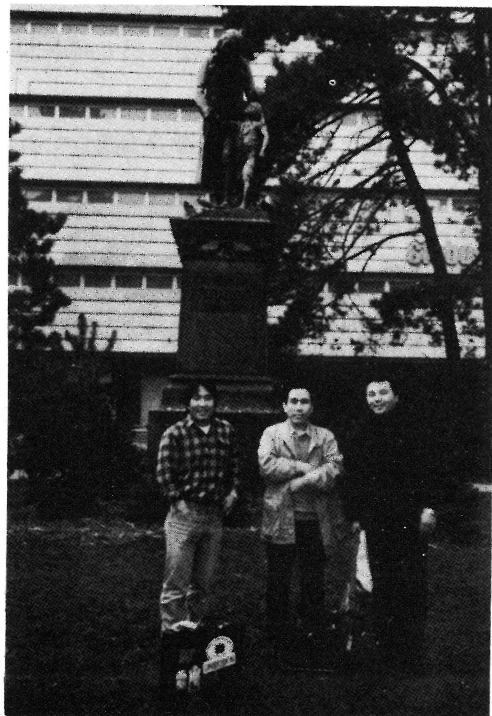
(1984・6・13)

写真7 管理棟の入口で



(左から北村, 白佐)

写真8 ペスタロッチ像の前で (チューリヒ)



(左から加藤, 白佐, 北村)